

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24611006

研究課題名(和文) オーストリアにおける「モーツァルト・ツーリズム」とその応用性に関する文化史的研究

研究課題名(英文) Cultural historical studies about "Mozart Tourismus" in Australian and its applicability

研究代表者

小宮 正安 (Komiya, Masayasu)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：80396548

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀半ば、オーストリア(またそれを中心としたハプスブルク帝国文化圏)においては「音楽国家オーストリア」というキャンペーンが盛んになり、その象徴的存在として注目を浴びたのがモーツァルトであった。またこの頃から、オーストリアの重要な政策の一つとして観光がクローズアップされ始め、モーツァルトはオーストリアの観光における中心となって現在に至っている。

本研究では、このような「モーツァルト・ツーリズム」とでも呼ぶべきオーストリアの観光政策の歴史を文化史の側面から検証しつつ、そこから演繹されるモーツァルト・イメージ、オーストリア・イメージの形成、ならびに我が国のツーリズムへの応用の可能性を探った。

研究成果の概要(英文)：In the middle of 19th century of Austria (and also cultural sphere of Habsburg empire) it was organized a campaign, so called "music nation Austria", and Mozart was its symbolic presence as an "Austrian" composer. Also from this time, tourism was closed up as one of the most important policy of Austria; in those movements Mozart has become a center of tourism of Austria from that time until today. In this study, while verifying the history of the tourism policy of Austria, which should be called as "Mozart-tourism", even from the perspective of the cultural history, I discovered the progress of Mozart-Austro Image since 19th century and explored the possibility of its application to tourism in Japan.

研究分野：ヨーロッパ文化史

キーワード：観光学 文化史 音楽史 社会史 地域研究 オーストリア モーツァルト ウィーン・ザルツブルク

1. 研究開始当初の背景

芸術、特に音楽の分野を音楽学や美学の視点からのみならず、多角的な視点から捉えようという動きが盛んになっている。音楽とツーリズムの関係を複合的に探る動きなどはその一例といえる。特に自他ともに「音楽国家」と認めるオーストリア場合、こうしたイメージ形成において「モーツァルト・ツーリズム」が不可分の要素として存在していることが、報告者のこれまでの研究や、近年の研究によりとみに明らかになりつつある。

にもかかわらず、オーストリアにおける「モーツァルト・ツーリズム」そのものについて、歴史的に掘り下げた研究は未だかつて存在しなかった。既にオーストリアとモーツァルトの関係については様々な先行研究が存在してきたのはたしかであるが、それらのほとんどは音楽学や美学の視点から、オーストリアとモーツァルトの関係を探るということにのみ力が注がれてしまっている。それでもマネージメント等に見られる音楽産業の側面から両者の関係を研究しようとする傾向は徐々に見られるようになってはきているものの、モーツァルトを中心に音楽と観光とを結びつけ、オーストリアの観光のあり方にメスを入れようという動きには至っていなかった。

こうした状況を鑑み、世に名高い「音楽国家」であるオーストリアにおいて、モーツァルトを密接に絡ませた観光のあり方が模索されてきた歴史を明らかにし、さらには芸術・文化を観光の柱に据えようとする我が国の動きにも有益な示唆を与えないか、という問題意識が、本研究をスタートさせるきっかけとなった。

2. 研究の目的

19世紀半ば、オーストリア(またそれを中心としたハプスブルク帝国文化圏)にお

いては「音楽国家オーストリア」というキャンペーンが盛んになり、その象徴的存在として注目を浴びたのがモーツァルトであった。またこの頃から、オーストリアの重要な政策の一つとして観光がクローズアップされ始め、モーツァルトはオーストリアの観光における中心となって現在に至っている。本研究では、このような「モーツァルト・ツーリズム」とでも呼ぶべきオーストリアの観光政策の歴史を文化史の側面から検証しつつ、そこから演繹されるモーツァルト・イメージ、オーストリア・イメージの形成、ならびに我が国のツーリズムへの応用の可能性を、音楽学や美学、史学といった視点はもちろんのこと、それらの学問領域では必ずしも掬い上げることのできない、あるいはそれらの学問領域を複合的に活用することが可能な文化史的アプローチから研究した。

時代的には、「モーツァルト・ツーリズム」が誕生した19世紀半ばから現代までを扱った。この間オーストリアは、ハプスブルク帝国、第一次共和制、ナチス支配、四カ国支配、第二次共和制という、五つの政治形態の中に置かれてきたが、それぞれの時代にあってオーストリアがみずから「音楽国家」たらしめようとした軌跡、ならびにその中心に「モーツァルト・ツーリズム」を置くようになった社会的・文化的背景を探った。

また「モーツァルト・ツーリズム」の歴史を探るためには、オーストリアにおける観光事業の歴史についても研究をおこなうことが必要である。折りしもモーツァルト再発見が進んだ19世紀半ば以降、当時草創期にあったツーリズムにとって、オーストリアは恰好の訪問対象となり、さらに万国博覧会等を通じ、19世紀後半には国内外に対観光国家としての側面を具えるに至った。そうした顔を

持つオーストリアが、とりわけ20世紀に入ってから後、いかなる観光事業を展開しえたかを検証した。

3. 研究の方法

時代的には、「モーツァルト・ツーリズム」が誕生した19世紀半ばから現代までを扱った。この間オーストリアは、ハプスブルク帝国、第一次共和制、ナチス支配、四カ国支配、第二次共和制という、五つの政治形態の中に置かれてきたが、それぞれの時代にあってオーストリアがみずから「音楽国家」たらしめようとした軌跡、ならびにその中心に「モーツァルト・ツーリズム」を置くようになった社会的・文化的背景を探った。

また「モーツァルト・ツーリズム」の歴史を探るため、オーストリアにおける観光事業の歴史についても研究をおこなった。折りしもモーツァルト再発見が進んだ19世紀半ば以降、当時草創期にあったツーリズムにとって、オーストリアは恰好の訪問対象となり、さらに万国博覧会等を通じ、19世紀後半には国内外に対観光国家としての側面を具えるに至っていたと思われる。そうした顔を持つオーストリアが、とりわけ20世紀に入ってから後、いかなる観光事業を展開しえたかを検証した。

これらの視点からオーストリアを捉え直すことにより、1)オーストリアが「音楽国家」となるにあたって「モーツァルト・ツーリズム」がいかなる役割を果たしたか、そこから演繹される2)観光事業が一つの国のイメージを形成する方法と可能性、3)音楽、ひいては芸術における観光事業の役割と影響力、といった、相互に関わりあう問題の解明に向け、考察と研究を展開する。また逆にオーストリア以外の他の地域、とりわけその音楽産業にとって一大マーケッ

トである4)日本において「音楽国家オーストリア」がどのような形で受け入れられてきたかという受容史の側面についても詳細な分析をおこなった。さらに5)モーツァルト・イメージ、オーストリア・イメージの形成に見るこれからの我が国のツーリズムに対する方法論の検討と提言へ向けた検証と分析とを遂行した。

またこれらの研究テーマを遂行するために、平成24年度は、19世紀半ばから始まり今日に至る「モーツァルト・ツーリズム」の歴史を俯瞰し、文化史的にどのような分析方法が可能であるかについて多角的な検討をおこなった。平成25年度・26年度は、ウィーンとザルツブルクにおける「モーツァルト・ツーリズム」を研究の具体的柱としながら、観光政策を通じて浮かび上がるモーツァルト・イメージとの音楽国家オーストリアの相関関係について詳細な分析を展開するとともに、こうしたイメージ形成のあり方から演繹される今後の我が国のツーリズムに対する応用性や方法論の検討をおこなった。

方法としては、国内外の諸機関における資料の調査・収集が主でない、とりわけモーツァルト・ツーリズム関係の資料を多く有することが判明しているウィーン楽友協会アーカイヴを中心に、ウィーン歴史博物館やザルツブルク・モーツァルテウム音楽院等を利用した。

4. 研究成果

平成24年度の研究では、19世紀以降のオーストリアで誕生・発展した「モーツァルト・ツーリズム」の歴史を俯瞰し、芸術・文化観光による国家や地域の振興という視点、ならびに文化史というアプローチからそれらをどのように分析できるか、という方法について、多角的に検討をおこなう。特に、1)モーツァルト再発見が進んだ1

9世紀半ば以降、2)ザルツブルク・フェスティヴァルに代表されるマス・ツーリズムを念頭においた動きが見られるようになった第一次世界大戦以降、3)マス・ツーリズムと距離をおいた各種ツーリズムの誕生の中で「モーツァルト・ツーリズム」が変容を遂げていった1980年代以降、の3つの時代に区分をおこなった上で、詳細な調査を重ねた。結果、これらの調査を通じ、「研究の方法」に記した5つのトピックに関し、検証と分析をおこなうための具体的な必要条件を整えた。

平成25年度は、オーストリアにおける「モーツァルト・ツーリズム」の代表的な都市であるウィーンとザルツブルクを具体的な事例の中心に据えながら、観光政策を通じて浮かび上がるモーツァルト・イメージの変遷、またそのようなイメージに基づいて作られる各都市それぞれのイメージが「音楽国家オーストリア」にいかなる形で反映されていったのか、という問題についての詳細な分析をおこなった。とりわけ、A)民間レベル(観光産業・観光業等)における「モーツァルト・ツーリズム」の受容と発展の歴史、B)オーストリアの音楽界にとっての「モーツァルト・ツーリズム」の位置づけとモーツァルトの作品のレパートリー受容に関する相関関係、という2つのトピックを設定し、それらを明らかにしていった。その結果、A)に関しては1842年ザルツブルクにおいておこなわれたモーツァルト像除幕式から始まるモーツァルト・フェスティヴァルが端緒となり、それが1920年以降のザルツブルク・フェスティヴァルにおける観光産業・観光業の活性化へとつながっていったこと、B)に関してはレパートリー受容そのものについては19世紀以降ほとんど変化していないが、特定の作品がモーツァルト・イメージを表象する存在としてモーツァルト・ツー

リズムと結びついていった過程が明らかになった。

平成26年度は前年度に引き続き、ウィーンとザルツブルクにおける「モーツァルト・ツーリズム」を研究の具体的柱としながら、観光政策を通じて浮かび上がるモーツァルト・イメージとの音楽国家オーストリアの相関関係について詳細な分析を展開するとともに、こうしたイメージ形成のあり方から演繹される今後の我が国のツーリズムに対する応用性や方法論の検討をおこなった。特に平成26年度は、C)オーストリアの音楽界にとっての「モーツァルト・ツーリズム」の位置付けとモーツァルトの作品レパートリーの受容に関する相関関係等、文化史的コンテキストにおける「モーツァルト・ツーリズム」の検証をさらに推し進めると同時に、D)芸術・文化振興の観点から捉えた日頃のツーリズムの比較分析をおこない、E)モーツァルト・イメージ、オーストリア・イメージの形成から演繹される応用性に基づいたこれからの我が国のツーリズムに対する方法論の検討をおこなった。その結果、C)に関しては特に視聴覚メディアが急速な発展をみせた1960年代以降、ザルツブルク・フェスティヴァルを中心にモーツァルトのオペラの世界的発信と、オペラをウィーンやザルツブルクの観光産業として売り出してゆこうとする動きの相関関係が顕著に見られることが判明した。またそうしたコンテキストの中で、D)E)に関してオーストリアにおいては音楽文化そのものが重要な文化資源として機能し、その資源に対し観光産業を含む経済界、さらには政界等が密接な連携を保っている状況が明らかになった。こうした状況は、我が国においてしばし議論的となる「国の文化政策」といったレベルにとどまらない、きわめて多様かつ複雑なシステムの上に成り立つものであると同時に

に、今後さらなる検討が加えられる必要のあるテーマとなるであろう。現時点としては、官民双方が緊密な連携をとりながら音楽文化の文化資源的側面をクローズアップしてきたオーストリアの姿勢に我が国も多いに学ぶ点があり、日本のとりわけ観光産業も視点と取り組みが可能であることを提言してゆきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11 件)

小宮正安 (単著) 『ディレタントの謎』、ジュピター134号(いずみホール) 10-11 ページ、査読無、2012年

小宮正安 (単著) 『楽友協会合唱団の謎』、ジュピター135号(いずみホール) 10-11 ページ、査読無、2012年

小宮正安 (単著) 『楽友協会管弦楽団の謎』、ジュピター136号(いずみホール) 10-11 ページ、査読無、2012年

小宮正安 (単著) 『楽友協会アルヒーフの謎』、ジュピター137号(いずみホール) 10-11 ページ、査読無、2012年

小宮正安 (単著) 『ルドルフ大公』、月刊都響 292号(東京都交響楽団) 36-38 ページ、査読無、2012年

小宮正安 (単著) 『ハプスブルク帝国とボヘミア』、音楽の世界第 52 巻(日本音楽舞踊会議) 4-8 ページ、査読無、2013年

小宮正安 (単著) 『ハプスブルク研究の今日的意義』、音楽の世界第 53 巻(日本音楽舞踊

会議) 2-3 ページ、査読無、2013年

小宮正安 (単著) 『グローバル化時代に 本国ものは有効なのか』、モーストリークラシック 202 巻(産経新聞社) 50-51 ページ、査読無、2014年

小宮正安 (単著) 『作曲家モーツァルトの生涯』、モーストリークラシック 203 巻(産経新聞社) 18-21 ページ、査読無、2014年

小宮正安 (単著) 『後期ロマン派音楽・世紀末芸術にウィーンとウィーン・フィルが果たした役割』、モーストリークラシック 209 巻(産経新聞社) 16-17 ページ、査読無、2014年

小宮正安 (単著) 『ウィーンとウィーン・フィル』、レコード芸術 63 巻(音楽之友社) 22-24 ページ、査読無、2014年

[学会発表](計 件)

[図書](計 3 件)

小宮正安 (単著) 『音楽史 影の仕掛人』、春秋社、2013年8月、ISBN: 978-4393930311

小宮正安 (単著) 『名曲誕生 時代が生んだクラシック音楽』、山川出版社、2014年3月、ISBN: 978-4634180017

小宮正安 (単訳) 『ウィーン楽友協会 200年の輝き』(オットー・ビーバ、イングリート・フックス著) 2013年12月、ISBN: 978-4087207187

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者：

小宮正安 (Komiyama Masayasu)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：80396548

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：